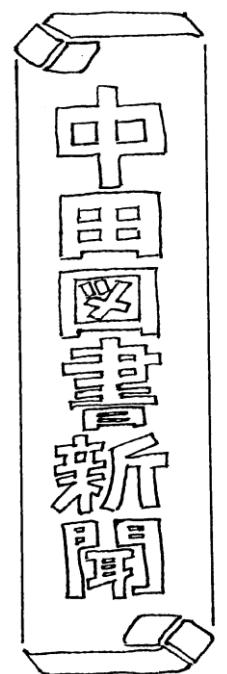


入れるべきか、出すべきか、

それが問題だ



■入れるべきか、出すべきか■運任せではない勝ち方とは■宇多田ヒカル「Automatic」が2位だった訳■本づくりの楽しさを知る



菅田将暉

『Tシャツの日本史』というタイトルに引っかかるを感じ、手に取つた。確かに本書以前にTシャツに関する通史は読んだ覚えはない（様々なTシャツをビジュアルで見せる本は多数あるのだが）。そして「歴史」ではなく「日本史」ってところがミソだろう。Tシャツの裾は入れるのが正解か、出すのが正解か？という、他の国の人たちからすれば「好きに着ればいいじゃん」で済む話が、時代時代で流行に乗り遅れまいと、同調圧を感じ続けてきた日本人の悲しい歴史が繙かれるのだった。

五十年も生きていると、ファッショントレンドは流転するだけでなく輪廻していくということが実感としてわかってくる。アイテムだつたりサイズ感だつたり、着こなしだつたり。アラレちゃん眼鏡、ハイウエスト、ケミカルウォッシュ、全体にオーバーサイズなどなど、ある時期には野暮つたく思えたものが、いつの間にか蘇つたりする。肩パッドやソーフトスースやボディコンシャスな

服たちも、草葉の陰から復活の時を見せてるのかもしれない（ゾンビか！）。

本書によれば九〇年代前半は渋カジが一般に浸透した時代。誰もがTシャツの裾を出し始めた。漫画の世界ですら主人公が連載途中から裾を出すという事態が出現（『SLAM DUNK』に関する考察は秀逸）。時は流れ二〇〇四年、一冊の本が刊行され翌年映像化。『電車男』である。主人公はシャツの裾をインしている。所謂「オタクファッショニズム」だ。当時の大半の日本人がこれをダサい

と感じた二〇〇五年を本書では裾出し同調圧のピークとしている。再び時は流れ二〇一〇年代半ば。鋭敏な若者は裾を入れ始めた。「あえて野暮なフックションを選び取ることで時代を支配していた同調圧力（筆者註・裾を出すこと）に風穴をあけた」のだ。その後「裾を入れることが制服化」していく、二〇年代のタックインの流行があると本書は見る。



先の鋭敏な若者の代表格が菅田将暉。確かに裾をインしているイメージがある菅田には、二〇一七一二年の五年間のスマップと振り下ろし計二四〇のコードネイネットを集めた『着服史』という一冊がある。が、最初の一枚こそTシャツをインしているが、すべてのコードで入れているわけではない。あたりまえだが、ルールに縛られたファッショニズムは、心身のバランスを崩していた時期、オカルトへの興味が唯一の心のよりどころであつたが「体調回復のため」オカルトを止めてごらんなさいと医師から言われるとあります。なんだか意味の分からぬ縛から解き放つてくれるのか？そして、五〇年後の日本人はTシャツの裾を入れているのか、出しているのか？はたまた…。

『Tシャツの日本史』が日本人を呪縛から解き放つてくれるのか？そして、五〇年後の日本人はTシャツの裾を入れているのか、出しているのか？はたまた…。

著者の大槻ケンヂ・通称オーケンは心身のバランスを崩していた時期、オカルトへの興味が唯一の心のよりどころであつたが「体調回復のため」オカルトを止めてごらんなさいと医師から言われるとあります。なんだか意味の分からぬ縛から解き放つてくれるのか？そして、五〇年後の日本人はTシャツの裾を入れているのか、出しているのか？はたまた…。

この人は本当にオカルトが好きで、いろいろ知識があり、その上表現が面白い人であることが良くわかります。オーケンは私と同年代なので子供のころに話題となつた口裂け女や五島勉のノストラダムスの大予言、ユリグラーのあたりの話はそういえばあつたなど

肯定でもなく、否定でもなく

懐かしく感じます。

タイトル『医者にオカルトを止められた男』にあるオカルトの意味、きちんと日本語で的確に説明できるかといえばできません。今回改めて調べてみました。「神秘

解は肯定でもなく否定でもなく、面白いがるというのもとても良いと笑えるエッセイです。

東

食べたら  
終わり



大槻ケンヂ



語、イイネ！

著者と同年代ということもあり、どの曲も懐かしく、読み進めながら、頭の中では旋律を奏でるという、まさに心躍る読み心地。ソードや蘊蓄も楽しく、忘れていた記憶がどんどん甦つてきて、全曲、聴きたくなります。

昭和というSNSなど全くなかった時代。でも、今より心が豊かで自由だったと感じているのは私だけではないでしょう。何となく生き辛くなつた令和の時代におスメの一冊です。



## 宇多田ヒカルの 「Automatic」が オリコンランキン

### 最高位一位だった訳

読んでいると頭の中で懐かしいメロディが自然と流れ始めます。読み終える頃にはカラオケで「この曲つて最高順位二位だったんだ」とちよつと語りたくなつてしまつでしょ。九十年代J-POPを愛する

過去オリコンランキン第一位になつた曲を調べたことがあります。

CDが一番売れた一九九〇年代は毎週のように一位が入れ替わり、生まれた「J-POP黄金期」。今のようにサブスクやSNSもなく、ランギングに入つてゐる曲はみんなソードや蘊蓄も楽しく、忘れていた記憶がどんどん甦つてきて、全曲、聴きたくなります。

昭和というSNSなど全くなかった時代。でも、今より心が豊かで自由だったと感じているのは私だけではないでしょう。何となく生き辛くなつた令和の時代におスメの一冊です。

なかつた楽曲があります。発売初週に五十万枚以上売れた曲や、累計ミリオンを記録しながらもウイークリーランキングでは一位を獲れたかつた曲も。

そこに注目したのが『なぜあの名曲は「2位」だったのか』です。著者によれば九〇年代に最高位は二位という曲は一九五曲あるということです。同日リリースされた曲、発売タイミング、プロモーション手法など、そこにはさまざまな理由があります。アーティストにとつてそれは屈辱だったのか、それとも勲章だったのか。その背景を丁寧に追うことでも、九〇年代特有のブームやメディア戦略、アーティストや楽曲そのものの力がどのようにヒットの構造を作つたのかが見えてきます。

## 多様性の笑い



浜田祐太郎



人にとって、懐かしさと発見が同時に訪れる一冊です。

野

ある」や「視覚障害者あるある」など、独自の視点で笑いに変化させます。『私が見えている』観客にも分かりやすく伝わるほど練りこまれた話芸。本当のことしか話さないという個性的なスタイル(※芸人の

が一人でも増えたら面白いなと思わずにはいられません。

毎

## ひと粒で 一度おいしい

『にっぽんのおかし』には、イラ

ストレーティーである内田有美さんの、色鉛筆やアクリル絵具で描かれた本物そつくりの独特な絵と、優勝したほどの実力者ですが、過去には目が見えないことを理由に落とされた経験があり、ある審査員か

らは、「劇場支配人が『盲目の芸人は使いにくい』と言つてはいる」というようなニュアンスのことを言われたこともあるそうです。障害に対する無理解から不遇に扱つた人たちへの不信感やひねくれた思いは、あるのでしようが、本書を通して感じるのは、サポートしてくれる周囲への感謝と、実績のある先輩芸人たからの「いじり」が成立する時代が来るのは・・・先天性の視覚障害があるピン芸人、濱田祐太郎の自伝的エッセイ『迷つたら笑つといつください』は、彼の舞台上での「つかみ」がタイトルになつています。

濱田さんは自身を「障害者を代表しているつもりはない」と語りますが、障害者がこれまでバラエティの世界に出てこられなかつたことを

しているつもりはない」と語りますが、障害者がこれまでバラエティの世界に出てこられなかつたことを

して、お試しください。

同じ著者の絵本『おせち』もオスメです。

読んでいると頭の中で懐かしいメロディが自然と流れ始めます。読み終える頃にはカラオケで「この曲つて最高順位二位だったんだ」とちよつと語りたくなつてしまつでしょ。九十年代J-POPを愛する

漫談スタイルの芸風。「盲学校ある

出来事を面白おかしく語るという影響を受けてお笑い界を目指す人

が、障害者がこれまでバラエティの世界に出てこられなかつたことを

# 富山のアニメ制作会社

## ピーエーワークスを知りたいならこれを読もう！

### 本づくりの 楽しさを知る

富山が拠点のアニメ制作会社

ピーエーワークス。その作品を観たことがある人にとっては気になる本ではないだろうか。『未来を照らす、灯りをつくる。』という二十五年の歴史を語る書籍が発行された。

最初のページに「ピーエーワークスのあゆみ」という年表がある。私自身はコミック担当で、アニメは観てきた方だと思うので懐かしさを感じつつ、こんなに制作されてきたのかという驚きも感じた。

個人的に気になっていた地域性のある作品が多いという話では、地域ありきでの作り方はして

いない、あからさまに聖地巡礼を狙おうということではないと断言されていたところが印象に残った。

経営上における問題が赤裸々に綴られていることも驚いた。あまり

聞いたことがない話だと思つてたら、初めて外部に発表される話と

世界であり、業界全体が苦労している中で、地元の制作所の経営における取り組みをこれでもかというほど知ることができた。オリジナルアニメの制作がかなり減ってきた時代において、オリジナルアニメを作り続けたいという話は熱い想いを感じる。今後もピーエーワークスの

作品を追いかけていきたいと思える一冊だった。

一方で、未知の業種のビジネス書を読んでいる感覚も味わえるので、アニメは全く観ないという方にもおすすめしたい。

跡



二〇二二五年七月、能登最北端の地で印刷業を営んでいたスズトウシヤドウ印刷が事業を終了するとの知らせが飛び込んできた。「スズさんは、約四十年に渡り同人誌の印刷人誌印刷会社だ。震災以降、スズさんは日々の状況をSNSで発信すると、全国のファンや同士から多くの応援メッセージが届き、その一つ一つに丁寧に返事をしている姿が印象的だった。その様子からは、発注者と受注者を超えて「本をつくる」という同じ目的を持つた仲間の絆が見て取れた。

そのことが心に残っていたことが、本づくりに携わる人々の歩みを記した本書を手にとった。『本が生まれるいちばん側では、長野県松本市で印刷業を営む藤原印刷が生まれるいちばん側では、長野県松本市で印刷業を営む藤原印刷の三代目である兄とその弟が本づくりへの熱い想いを綴った一冊だ。かつては教科書や専門書を中心に黒子として働いていた藤原印刷が、個人の「自分で本をつくりたい」という気持ちに応え、伴走し続けた十五年の軌跡が書かれている。個人製作の本と一言で言つても内容も依



した。

近年、ZINEをはじめとした小規模な自主出版物の人気が高まっている。誰にも忖度せず、商業的な縛りも無く、全力で自分の「好き」を突き詰め形にできる。何でもありの表現方法はどこまでも自由で個性的だ。だからこそ他者を惹きつける魅力があるのだと再確認した。

丁寧に表紙に貼つて完成させたアートブック、家業の自動車工場で働く父の姿を残したいと娘さんが頼者の要望も多種多様。思い出のワンピースを切り刻んで一枚ずつ限定十五部だけ作成した写真集、段ボールを表紙に使いガムテープで背表紙を貼り付け、さらにタイトルはマジックで走り書きという執念の一冊。

これらを含め、紹介されている本の製作依頼者たちは決してプロの作家でも専門家でも無い。知識も経験も無いけれど「自分のために本をつくりたい!」という意欲に燃えている。その熱量を受け止め、印刷屋としてアドバイスをし、共に試行錯誤しながら完成まで二人三脚で走り続けてくれるのが藤原印刷なのだ。